

校外学習における博物館の活用 ～『房総のむら』における学習支援事業～

県立房総のむら学芸員 よしだ あゆみ
吉田 歩未

「千葉県立房総のむら」は、参加体験型の博物館として昭和 61 年 (1986) 4 月に開館した。その後「房総風土記の丘」との統合や指定管理者制度の導入を経て、今日に至っている。約 51ha におよぶ広大な敷地には、再現された房総の商家・武家屋敷・農家のほか資料館、移築された民家、龍角寺古墳群等がある。自然に恵まれた環境の中で、衣・食・住・技の移り変わりを、年間 460 種類以上の展示・体験・実演等を通して、子どもから大人まで学べる画期的な博物館である。

当館では年間約 400 校の学校の校外学習を受入れており、千葉県内では主に小学校 3 年生の社会科の单元「昔の暮らし」の学習、6 年生の同じく社会科の单元「縄文のむらから古墳のくにへ」での学習を目的に多くの利用がある。ここでは房総のむらで実施している博物館ならではの学習支援事業について紹介したい。

1 団体体験

職員による解説や実演の後に製作体験を行うものである。社会科で習う「昔の暮らし」や「わたしたちの県の伝統工芸」などに関連したプログラムとなっており、房州うちわ作りや太巻き寿司作りなど千葉県伝統の体験も実施している。

2 ワークシート学習

商家・農家・竪穴住居・101 号古墳などをテーマとした問題集となっている『房総のむら探検ノート』を配布している。グループ活動の際に活用する学校が非常に多い。また、『社会科見学見どころ集』として、教員向けに房総のむら及び周辺施設の案内書も併せて配布しており、新たな校外学習の場を探す資料として活用されている。

3 昔のくらしの説明

職員による昔のくらしや生活用具・農具などの解説を行うもので、実際に農家にある道具などに触れながら、当時の人々のくらしを学習することができる。

4 ボランティアガイド

ガイドを希望する施設や内容を事前に確認した上で行うもので、学年や学習目的にあったガイドができるように努めている。



商家町並みでのガイド風景

以上学習支援事業について紹介したが、このほかにも教職員向けの博物館活用研修会の実施や中学生・高校生の職場体験、大学生のインターンシップ・博物館実習、教員の研修の受入れなども年間を通して行っている。

当館を校外学習の場として利用していただく際には、学習目的やねらいを明確にした上で、事前の下見をお願いしている。こうすることで、目的にあったプログラムの提案ができ、校外学習を効果的に行うことができる。

問い合わせ 房総のむら 電話 0476-95-3333
URL: <http://www.chiba-muse.or.jp/MURA/>

企画展「メタルアートの巨人 津田 信夫」

県立美術館主任上席研究員

なかまつ 中松 れい

千葉県立美術館では、平成28年10月25日（火）から平成29年1月15日（日）の会期で、企画展「メタルアートの巨人 津田信夫」を開催します。

津田信夫は、明治8年(1875)に佐倉に生まれた千葉県出身の工芸家です。工芸は、木を使う木工、土を使う陶芸など、使用する材料により様々な技法があります。津田は金属を使う「金工」の中の、「鋳金（ちゅうきん）」と呼ばれる技法で、たくさんの優れた作品を残しました。

日比谷公園にある鶴の噴水を、御存じの方も多いのではないでしょうか。季節のニュースなどで、「今日は寒さで鶴の噴水の水が凍りました」などと紹介されることがあります。実はこの噴水は、津田が手がけたものです。日本橋の橋上に飾られた、麒麟（きりん）や獅子の像などの鋳造事業も、津田が担当しました。

■鋳金とは

鋳金は、高熱で溶けた金属を、あらかじめ用意した型に流し込み、冷えてから取り出して仕上げる技法です。歴史は古く、日本では弥生時代の銅剣類まで遡ることができます。奈良の大仏などの仏像や、身近なものでは、お寺の梵鐘、お湯を沸かす鉄瓶などが鋳金の技法で作られています。

■工芸作家として

特に動物置物で優れた作品を残しました。それまでは動物の毛筋一本まで克明に表現したものや、眼や爪など細部の表現に優れた作品が評価されていましたが、津田はそうした緻密な装飾よりも、動物の形態、骨格、気配のようなものを表現することに注力しました。



写真 北辺夜猫子

写真は《北辺夜猫子》（ほくへんやびょうし）という作品です。北辺とは、北のあたり、北のはて、という意味で、夜猫子とは、中国語でフクロウの事です。この作品では、フクロウの体に羽根模様のような毛の様子を示す装飾を施していません。そのかわり、形態を注意深く観察して表現しています。全体を微妙なふくらみを持つ曲面で構成しており、目や口元などは、限られた線で表現しています。そうでありながら、写実的で「リアル」です。装飾よりも、形態への関心と動物の写実的表現が、津田の作品を特徴付けています。

■展覧会について

今回の展覧会では、全体を初期、中期、後期の3つの時代に分け、各時代に制作された津田の工芸作品と、各時代に交流した工芸家たちの作品、さらに、各時代に担当した依頼制作を紹介するパネルにより、メタルアートの巨人、津田信夫の業績を紹介します。

千葉県立美術館 千葉市中央区中央港 1-10-1
電話：043-242-8311

URL：<http://www.chiba-muse.or.jp/ART/>

教員のための博物館の日 2016

～楽しみながら、活かそう！学びの宝庫「中央博物館」～

県立中央博物館教育普及課 主任上席研究員 やすかわ ゆうき 安川 裕樹

博物館には、学校の授業に役立つ学習資源がたくさんあります。教員の皆さんにもっと博物館を身近に感じてもらえるように、そして、博物館の学習資源を具体的に知ってもらうことを目的として以下のようなイベントを開催しました。子どもたちに学ぶ楽しさや喜びを味わってもらうために、まず教員の皆さんに博物館を楽しんでいただきたかったと考えたためです。

1 「知って得する博物館」(6/15 実施)

当日は、人類の進化について理解を促す学習貸出キットや生命の歴史、地球の歴史を理解するために重要な化石の学習貸出キット、昆虫標本作製のために必要な道具や中学1年生用国語教科書に掲載されているヘルマン・ヘッセ作「少年の日の思い出」の授業に使用する学習貸出キットの紹介を行いました。



グループで活発に意見交換

2 「博物館でアクティブ・ラーニング!」 (7/26 実施)

学校でも社会教育の場でも、持続可能な開発のための教育（持続発展教育、ESD）に対する注目が高まっています。学習指導要領でも重視されるアクティブ・ラーニングの手法を使って、ESDとはどんな活動なのか具体的な事例をもとに考えていただきました。

3 「博物館利用研修会」(8/1 実施)

中央博物館の展示室や生態園について理解を深めていただき、その活用方法を具体的に検討してもらう機会としました。「展示と児童生徒をつなぐ学習支援活動」をテーマに国立科学博物館のスクールプログラムとも連携して、骨格標本を活用した取組を実際に体験してもらいました。



スクールプログラムを体験

研究機能もある中央博物館には、多くの専門家がいます。また、実物や教材になる標本もあります。利用することで学習活動を充実させることができるとともに、大きな教育効果も期待することができます。



展示資料の活用を検討

これらのイベントをきっかけに、一人でも多くの教員の皆さんが中央博物館とつながっていただけることを望んでいます。そして、必要に応じて中央博物館と教員の皆さんが子どもたちのために連携、協力しながら質の高い学びをつくりあげることができるようにしていきたいと思います。

平成28年度 千葉県総合教育センター・千葉県子どもと親のサポートセンター
研究発表会ご案内！！

未来をひらく千葉の子どもたちのために

～社会の変化に対応できる資質・能力の育成をめざして～

日時 平成29年2月24日(金) 9:00～16:30
(全体会 受付9:00～9:25)

会場 千葉県総合教育センター

全体講演 9:40～11:10

「志高く未来を創り出していくための
資質・能力を育む」
国立教育政策研究所 教育課程研究センター
基礎研究部 総括研究官 西野 真由美 氏

研究発表 11:20～12:00 13:00～16:20

研修事業充実のための調査研究
～「千葉県教職員研修体系」に基づく
「教職ライフステージ研修」を中心に～
【カリキュラム開発部 研究開発担当】

全国学力・学習状況調査について
～千葉の子どもたちの学力向上に向けて～

【学力調査部】

校内研修活性化に向けた手法の研究
～参加・体験型校内研修の
ガイドブックづくりを通して～
【カリキュラム開発部 研究開発担当】

カウンセリングの考え方を活かして築く
保護者との信頼関係
～事例から考える具体的なアプローチ～
【子どもと親のサポートセンター 教育相談部】

特別支援学級担当者の専門性向上パッケージ
の開発＜中間報告＞

【特別支援教育部】

生活を豊かにするためのSNS利用に関する
指導法の研究

【カリキュラム開発部 メディア教育担当】

科学的思考力を高める指導方法と評価の
在り方＜中間報告＞

【カリキュラム開発部 科学技術教育担当】

「主体的・対話的で深い学び」を実現するた
めのカリキュラムについての研究＜中間報告＞

【カリキュラム開発部 研究開発担当】

各研究発表の詳しい内容や時程等につきましては、別紙案内チラシ
および千葉県総合教育センターWeb サイトにて御確認ください。

特別支援学級担当者の専門性向上パッケージの開発

～質問紙調査の調査結果から～

県総合教育センター特別支援教育部

1 はじめに

現在、小・中学校に在籍する児童生徒が減少する中、特別支援学級に在籍する児童生徒数は増加の一途にあります。特に、自閉症・情緒障害特別支援学級の在籍児童生徒数は、平成20年度に比べて約2倍増(464人)となっています。一方、特別支援学級担任の経験年数は、3年以下が全体の4割を超えている現状に加えて、経験豊かな特別支援学級担任の退職が続く中、特別支援学級担任の専門性の維持・向上が大きな課題となっています。このことから解決方策の一つとして「特別支援学級担当者の専門性向上パッケージ」を開発することとし、昨年度、専門性向上パッケージの内容検討を目的に、特別支援学級担任を対象とした質問紙調査を実施しました。

2 質問紙調査の概要

(1)調査対象：県内小・中学校の知的障害及び自閉症・情緒障害特別支援学級で担任をする全ての教員(千葉市を除く)1,734人

(2)調査期間：平成27年7月～8月末日

(3)調査方法：質問紙調査(郵送による)

(4)調査結果：回収率：94%

(5)主な調査結果

①指導・支援上の困り感や課題として挙げられた項目の中で最も多かったのが「教科・領域の指導」、以下順に「障害特性の理解と対応」「教育課程の編成」「交流及び共同学習の計画・実施」でした。中学校は、小学校に比べ「二次的な症状への対応」の割合が高く、進路指導の課題が更に加わります。

②「教科・領域の指導」では、児童生徒や学級の実態が多様化するなか、「何を、

どこまで、どのように指導・支援すべきか」等の具体的な学習内容や方法がわからないなどの回答が多いとともに、個人差が大きいことへの対応や個別課題の準備に十分に時間をかけられずにいます。

③交流及び共同学習の推進により、通常の学級との時間調整や急な日課変更への対応などで苦慮していることが多く挙げられました。また、在籍する児童生徒が全員そろって授業できる時間が少なくなり、特別支援学級ならではの授業展開がしづらくなっている現状もあります。

④校内での特別支援学級に対する理解と支援体制の充実が求められています。

3 まとめ

担任経験年数により質的な困り感や課題に違いはあるものの、日々の教育実践に苦慮している担任が多いと言えます。通常の学級での経験が長くても、障害のある子どもを前にすると、それまでの経験を特別支援教育に生かせずにいることが教科指導の状況や指導形態から推察されます。このことから、特別支援学級担任に必要な支援として①担任経験年数の浅い教員の実践をサポートするデータベースや校内の支援体制の充実②情報の共有化(ネットワーク)と研修等の充実が求められていることが明らかになり、専門性向上パッケージの開発が急務であると言えます。

※詳しい本調査の結果は、千葉県総合教育センターホームページ内の「特別支援教育部」で閲覧できます。

<https://db.ice.or.jp/nc/>

※文中の「困り感」の用語は、学研の登録商標です。

学習状況調査の結果分析を活用し、指導改善に役立てましょう！

県総合教育センター学力調査部

平成 28 年度の全国学力・学習状況調査は、4 月 19 日（火）、対象学年の児童生徒に実施されました。今年度は国語、算数・数学の教科に関する調査と、生活習慣や学習環境に関する質問紙調査です。国語、算数・数学については、「知識」に関する A 問題と、「活用」に関する B 問題でした。質問紙調査は、児童生徒に対して行うものと学校に対して行うものがあり、2 方向から児童生徒の生活習慣や学習環境を調査するものです。

1 検証改善サイクルの確立を目指して

本調査の結果を見たときに「正答率や正答数」だけにとらわれてしまいがちですが、本調査の目的は次の 3 点です。

- ①「実態把握及び分析」を行うことで「成果と課題を検証」する。
- ②それらを踏まえて「継続的な検証改善サイクルを確立」する。
- ③それらに基づいて「教育指導、学習状況の充実や改善を図る。」

これらの目的から、本調査の結果を踏まえた学力向上に向けた改善の取組が大切です。



各学校が調査結果を指導改善（PDCA）サイクルに乗せて活用していく場合、

県として独自に考えた「指導改善サイクル」（左下参照）を提案しています。具体的に説明すると、調査実施後は、校内で調査問題を十分に吟味してその趣旨や内容を捉えます。調査結果の出る 8 月から 9 月は、県の分析ツールを活用して分析し、各学校の実態に応じた指導改善方法を具体化していきます。そして、次回の調査でその成果を検証するという流れです。

2 全国調査の結果を活用していますか？

ぜひ、総合教育センターの分析ツールを活用してください。

総合教育センターの Web ページからダウンロードし、簡単な操作で以下の 3 つの分析シートを作成することができます。分析ツールは、以下のとおりです。

(1)教科・質問紙分析シート

レーダーチャートに全国、千葉、各学校の教科の結果を表示、分析することができます。

(2)誤答分析シート

各教科一問一答の誤答分析ができるだけでなく、全体を 4 つの層に分け、どの層がどういう誤答をしているか細かく分析できる。

(3)クロス集計シート

生活習慣や学習習慣と学力との関係を知ることができる。

自校での分析作業を軽減するために、分析シートを簡単に作成できるようにしました。

全国学力・学習状況調査は、今年で実施 10 年目になります。過去から現在までのデータを活用し、より詳細な自校の傾向を把握することも可能です。先生方全員で分析ツールを活用し、指導改善に役立ててください。